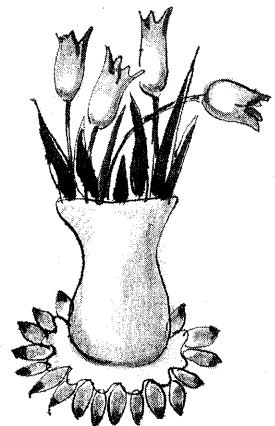


一粒の麦

赤羽美代子



母、寿尾は一九八八年一月八日、満九十九歳の高齡にて、この地上を去りました（あと、十五日にて満百歳を迎える筈でした）。

母は、地上の生活が終わる日迄、聡明で、心明ら
い、可愛い、素直なお婆ちゃんでした。

我が家は、百歳を迎えようとするこの母を「永遠の
若者」と思い込んでいる、樂觀家族です。その半面、
母は我が家の珠の様なひとりっ子でもあると、暢気な
思い込みに浸っております。

母も又、コロコロと良く笑い、良く語り、若い母親
役と、丈夫で育て易い子ども役の、二役になりきりま
した。時どき私は「他所の子には輝しい未来があるの

に、家の子には未来がないなあ」と、明日をも知れぬ
我が子の余命の短かさに、失望と淋しさを覚え、この
現実を噛みしめる日も有りました。

以下、母の生前の日常の思い出を、幾つか記してみ
ます。

第一話 約束 お墓 外国

ある晩、母と入浴の時、母は私に「長生きすると、
皆に迷惑を掛けるばかりで申し訳ないね。時どき心配
になる時があるのよ。私は死なない病気に罹っている
のではないだろうか」と心配そうに語ります。「何
言ってるの。そんな相談は迷惑よ。だまって百歳を越

えて下さい」「そうかい。これ以上の迷惑は掛けられないね。それでは百歳迄生きてみるよ」と指きりげんまんをして約束をしました。

又、続けて、いかにも母らしい発想を語ります。

「あなたは、クリスチャンにおなりだから青山のお墓（青山墓地）には入らずに、教会のお墓に入れてお貰いよ。青山に入っても御先祖様方とは、話が合わなくて、つまらないよ」と、真剣な顔で申します。更に話がつすみます。「あなたの様な性格は、どうも外国の暮らしが、性に合っているように思うのよ。日本はどこか考え方が、コセコセしているらしいね」「外国で暮らす時は、お婆ちゃんも連れて行くわよ」「あれまあ、オホホホ。一度行ってみたいね」その夜、母は何やらウハハハ、ウハハハと、真剣にうわ言を言います。「外国で迷い子になって、汗をかきながら道を聞いている夢を見た」との事でした。

「どこの国へ行ったの?」「それがね、テレビで見ただ、パリーの凱旋門の前に立っているらしいのよ」と

心細く、恐ろしそうに話します。一足先に出発とは、恐れ入りました。

第二話 生まれ変わるとすれば

午前零時、テレビから放送終了の音楽が流れると、母は、もう我慢の限界とばかり、むくっと布団から起き上がり、私に寝る様に促します。「さあ、自分のお部屋へお引き取り下さい。明日は幼稚園に可愛いお子さんが来るんでしょう?寝不足の先生では、子どもが見えなくなるよ」「ホラ、テレビがお休みなさいって知らせてますよ。ぐっすり眠って、明日は爽やか先生でいなければね」「おや、先生は、これからお風呂にお入りかい?既に明日に突入しましたよ」と、一生懸命に私を寝かせつけ様と努力を続けます。私はちよいとふざけて、母が座している布団の中に、ゴロリ、バタンと倒れますと「あら、ほら御覧よ。そんなに倒れる迄、起きていなくても良さそうなものに。困った子だよ。私はとっても抱っこして上げられませぬよ。ホ

レ、ホレ、今なら歩いてお布団に行かれるでしょう？」私は笑いをこらえて、母の枕をしっかりと抱きかかえ、寝た振りを続けます。「困った子だね、私はね、今度、生まれ変わるとすれば、寝つきの良い子を生まなければ、ホラ、風邪をひくよ」と、私が笑いをこらえて丸くなっている背中を撫でたり、叩いたり、努力を止めません。（それにしても、生まれ変わる事があつた時の、母性愛まで發揮しているのですから、楽しい事）

そんな時の私はふと、明日の幼児との関係も、こんな関係でもいいいな、なんて、思えたりする瞬間です。「お休みなさい」って可愛い声を？張り上げますと、母も「ハイ、御機嫌よくお休みなさい」と、ゴロリと横になります。そういう時の母は、決まって自分では掛け布団を掛けません。ボタンと横になると、ニコニコと笑って私を見えています。「本当に手が掛るんだから、自分で掛け布団位掛けるんですよ」と、私が母の寝やすい様に布団を掛け、首の辺りをトントン

と叩きますと「オホホホ。有り難う。明日又、元気で会いましょうね」と、早くも、スースーとネンネのお国へ出発です。気持ちの良さそうな寝顔だ事。

第二話 「御」の字

母が語る言葉は、単語の初めに「御」がよくつきます。或る日私が、「今日から“お”はつけないで話しましょう。特に自分の事には“お”を取りましょう」「そうかい。それでも、他所の方には礼を尽くさなければいけませんよ。普段の言葉が肝心なのよ。自分の事には“お”はつけないだね？解りました」「お婆ちゃんだって、“お”が取れると楽よ」そんな会話をした後、母は少々いたずらっぽく「M子さん『茶、くれ』」と、ニコニコ笑って申します。「今、何て言ったの？」「だって今から、“お”を取るって言ったでしょう？ですから『茶、くれ』」と腕捲くりをし、胸を張って見栄をきります。普段は家人に「お茶をおくれ」と言う具合なのです。突然の母のいなせ

な、威勢の良い江戸っ子のお婆ちゃんに、周囲の者はな—る程と唸ったり、感心したり、終わりには母も家人も、お腹の底から大笑いを致しました。

後日、「御」取り事件が起こりました。(第五話にて記す)

第四話 母の入院

一九八七年十二月に、母は風邪をひき、食物を吐き、欠尿の症状も出てきましたので、急ぎ入院する事になりました。やがて救急隊員の方が、急ぎ我が家に入ってきました。母は白いヘルメットに白衣を着た、母にとって突然の侵入者の方たちに、大変驚きました。私と姉が床の上に座している母を支えていましたから、母は私たちが庇い守る様に自分の両手を左右に大きく広げ、力強くびしっと言いました。「何をなさろうとするんです。何をなさる気ですか」と一喝しました。私は慌てて、母に「肺炎になるといけないでしょう?病院に入って風邪を治しましょう。すぐ帰れ

るのよ」と申しますと、母は直ぐに理解してか、静かに考えている様子です。我が家との最後の別れが来たと、覚悟をした様子でした。が、直ぐに、しっかりと救急車の方に「御苦勞様です。よろしくお願いします」と挨拶をし、「火の始末は大丈夫かい?」と、気を配ってから救急車に乗り込みました。

車の中では、私の手を取って「お世話になったね。有り難う。有り難う」と言い続けておりました。

第五話 再び「御」の字

病院では、医師・ナース・付添いのKさん方より、可愛いお婆ちゃま、美人お婆ちゃま等と年齢を越えた素敵なお名前を戴いたのに、本人は只、一日中ス—と眠る時間が長くなりました。が、医師、ナースの方に大変な神経を配ります。「ハイ」「さようございます」と、しっかりした返事に、可哀相になる時があります。

或る日、私が病室に入るなり、Kさんが「今日は本

当に驚きました」と、目を丸くして語ります。「母に何かありましたか？」驚く私に「ハイ。もう驚きました。御隠居様を寝返りさせようとするので、『ケツ』が痛い」と申しましたので、聞き返しますと『腰が』と腰に手を当てます。日頃、淑やかな御隠居様が『ケツ』等と申しますので、もうビックリです」私は恐縮しつつKさんに「まあ、ごめんなさい。私の教育が悪くて。母は、自分の事なのでおケツの『お』を取ったんですよ」Kさんは、理解しがたい様な顔で、母の寝顔をじつと見つめていました。

第六話 返事

一月六日、母の容体が急変して、呼吸困難になりました。医師より時間の問題ですと告げられました。七日の朝方には、吐く息も力弱く、いよいよ私たちも覚悟を決めました。

そんな時、ナースの方が「赤羽さん」と大きな声で母を呼びながら室に入って来ました。全員が、その

声に驚いた時、意識の無い筈の母が、大きな声で、ひと声「ハイ」と返事をしました。その声の太く力強い声は、とても呼吸困難の中から絞り出した声とは思えません。全員、電気に打たれた様に、ショックで直立してしまいました。

日頃、百歳迄、生きる事が、私たちへの恩返しであると考えている母でしたから、私は臨終を迎えた母の耳に口を寄せて「今日は、お母様の百歳のお誕生日ですよ。お目出度う」と申しました。それは、母が胎内で生命を与えられた日より数えれば、百歳は越えているのですから。

私の一語で、母はホッとしたのか、私の手を握り返し、嬉しそうに天国へ旅立ちました。

〈はじまり〉

一粒の麦が地に落ち死んだ日より、恥ずかしながら、私の遅い遅い巣立ちが始まりました。遅過ぎた巣立ちの小鳥にも、広い空を翔ぶ時に必要な、丈夫な羽

が育てられ、準備されていた事を覚えます。

神様の呼ばわりの声に、隠れたりせず、どの様な御用にも「ハイ」と御返事をして、このままの私を神様に表す事が素晴らしい事なのだと、遅い巣立ちの小鳥は羽を広げました。

残された者の心は、この日より多くの実を結ぶ為の作業がはじまったのです。失った実の大きさを感じつ

つ、得た実はいかに大きく、豊かな実が結ばれる事を信じています。

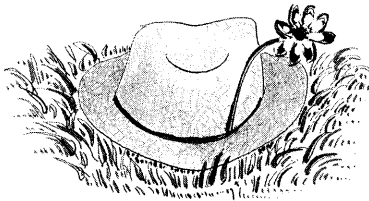
「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」

ヨハネによる福音書 十二章二十三節・二十四節

(靈南坂幼稚園)

いのちの始期

中山まき子



へ始まりさがしーそのー

「ねえ、始まったわよ、来る？」知人からうわずつた声で電話が入ったのは、梅雨明け前のある夕方だっ

た。私が閑静な住宅街の一角にあるマンションに着くと、当のご本人が「いらっしやい」と白いネグリジェ一枚の姿で迎えてくれる。こともあろうに、今から彼